

鳴かぬ螢は灯と灯を結び、鐘の音の雫に身を焦がす。

1mm

控えめながらも、いつも明るい色で微笑んでいる。そんな彼女が、私と二人の時にだけ見せる素の表情に、私はただただ、想いを寄せてあげることしか出来ないのだ。

[A面：彼女には憂いがある。]

私の大好きな親友は、私の大好きな兄の、元恋人である。

元、というのは、兄が既に他界している為だ。

それはそれは唐突で、大好きな兄がこの世からいなくなったという事実に、当時は「心に穴が開いたような」という表現は的確な表現だったのだなとさめざめ悲しみに暮れたものだ。彼女の話に入る前には長くなりすぎるので割愛するが。

それで、私の大好きな親友の話である。

私の大好きな親友は、私が見える範囲では、妹という立場に配慮したのか兄とべったべたな甘いラブラブはしていなかったように見えた。それでも、兄のことをとても好きだと思ってくれているのは確かで、そんな二人の空気が私はとても好きだったのだ。兄がこの世から去って、彼女も、しばらくは私と同じに、茫然とする心を抱えながら過ごしているのが目に見えて痛々しいものだった。

尤も、そうして彼女と一緒に悲しみを抱えてくれたからこそ、私は兄の死を引き摺りすぎずに済んだのだった。

しかし、彼女は。

「見て弥桜、此处、晴臣が気にしてたお店だわ」

彼女が雑誌のページを指差す。

二年程前に出来た喫茶店だっただろうか、最近その新メニューが女性客の人気を呼び、よく取り上げられているようだった。……とはいえ、兄が言っていたとなると、出来たばかりの頃のことだろうか。

「……そうなんだね。兄さん、何て？」

……「何て『言ってたの？』」、と、彼女に対して自分が過去形を使うのは、いつも酷く躊躇われる。気付いたのは、割と早かった。自分の過去形と、彼女の過去形は、——その期間が違いすぎるのだと。

そう、まるで、彼女の中の兄は……未だ一緒に生きているかのようで。

「可笑しいの。私が『だったら弥桜を誘って行く』と言ったら、『俺が言ったのに』と拗ねていたのよ、でもこういうお店なら私は晴臣よりも弥桜と行く方が絶対楽しいもの、仕方無いじゃない？」

ねえ？と、悪戯っぽく笑う。二年前の思い出を辿っているのか、それとも。

と、そう思った次に。

「……仕方無いじゃない、ねえ？」

同じ言葉、でもそれは……それまでの声音と丸っきり違う、まるで、不意に現実に戻されたかのような。

彼女の表情を伺う。いつも微笑んでいる彼女の、不意に溢れてしまった憂いに、そっと俯く。その手だけはぎゅっと握って——どうか、と祈るように想いを寄せて。

「私がいいなんて嬉しいな。一緒に、行こうね」

「……うん、」

二人でじゃない、紗璃の中の兄さんも一緒に。行こうね。

正しく届いた意図に、彼女がそっと目を伏せたことが、小さな救いだっただ。

\*

「……なあ、やっぱ言った方がいいんじゃないか？ 弥桜絶対勘違いしてるだろ」

「絶対やだ。弥桜は晴臣のこと大好きなんだから絶対やだ。」

「んええー……」

だって知ったら晴臣のこと大好きなんだから晴臣のこと聞きたいでしょ。何で弥桜と一緒にいるのは私なのに晴臣の話をしてやらなきゃならんのだ。

[B面：私には秘密がある。]

「お前ね。ほんと、お前ね。妹が悲しんでるのを何でお兄ちゃんが黙って見過ごさなきゃいけないんだ。俺だって痛いんだぞ」

「痛覚無いでしょ」

「生者じゃなければ心が無いとでも思ってるのかお前」

「感情なんて本人が自分を誤魔化せばどうにでもなる」

「お前俺のこと大好きなのか大嫌いなのかはっきりしない？」

「どっちも本当だからしない」

「んんー……」

生きていた頃よりも距離が近くなった（物理的に）  
（質量が無い存在なので物理的にという表現を使って正しいのかは分からないが）恋人は、今日もよく分からないことで悩んでいる。大好きと大嫌いは共存すると思うが。大好き100%だなんて、それは盲目だ。私はこの恋人のことを、彼が生きていた頃よりも真っ当に大好きだと思っている。詳しくは長くなるので割愛するが。

今は私の秘密の話だ。

私には、大好きな親友にも未だ打ち明けられていない、秘密がある。

幼い頃から、大人には見えにくい存在というものが見えていたのだ。それは、小さい子どもには珍しいことで

もない。普通じゃないのは、自分の場合、それが年齢を重ねていっても薄れていかなかったということ。

とはいえ、そういった存在に、積極的に関わっていかねければ特に支障が生じることはない。関わらなければ生きている他人と同じだ。寧ろ、人外なだけに色々と便利な力を持っている存在も多く、生きている人間よりもいいお付き合いをさせて頂いているものもいる。

この恋人も、そういうもので。

死んでしんみりしていた日々の中で唐突に現れたこの人（もう人じゃないけど）は、今は、私と彼女の守護をしている。

「……一応、演技ではないから」

「ん？」

「……貴方と、私と弥桜と、一緒の空間を、三人では共有出来ないこと。貴方が生きていてくれたら、貴方が弥桜とも一緒に笑い合えたら、と思って寂しくなる。貴方は『勘違い』だと言うけど、……私は一生、貴方が此処にいることが嬉しいと同時に貴方が死んでいることが痛い」

「……ごめん」

「許さない。だからどっちにもはっきりしないとっているわ」

「ん。ごめん」

……真面目にしよげる晴臣が可笑しく思えてしまったから、もう、弥桜に打ち明けてもいいかもしれない。

笑って彼女に話せる自信が無かった。本当の理由なん

て、それだけだ。だから。

\*

[同時再生：鳴かぬ螢は灯と灯を結び、鐘の音の雫に身を焦がす。]

難儀なものだな、と思う。

生きていた頃よりもずっと、見えることも考えられることも増えた。とはいえ、賢くなれたわけではないが。

見える彼女は、「自分には見えるのだからこの存在は自分にとってだけは変わらない」のだと言っていた。その「自分にとってだけは」という意味を、理解出来ていなかったのだと気付かされた。

難儀なものだな、と思う。

割り切らない彼女が、愛しい。

プロポーズ紛いのことを言われてまで、うだうだと——結局は自分も意識下で考えていたのだ——渦中に潜んでいる必要は無いのだろう。

大事な彼女が、大事な妹と、秘密を共有し合って笑い合えたその時が来たら。

彼女達に降らせるのは、想いを映した赤い花。

\* \* \*

\*

(1, 143+1, 102+333 = 2, 578文字)